

		28京産大学室第1006号						
		平成	28	年	4	月	8	日
文部科学大臣 殿								
大学等の設置者								
(名 称)		学校法人 京都産業大学						
(所在地)		京都市北区上賀茂本山						
(代表者氏名)		理事長 柿野 欽吾						
		(記名押印又は署名)						
大学等名		京都産業大学						
平成27年度 国際化拠点整備事業費補助金 (スーパーグローバル大学等事業) 実績報告書								
プログラム名称・選定年度	スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(タイプB:特色型)						平成24年度	
事業名称	グローバル社会で活躍する理系産業人育成プログラム							
補助事業の実績等	別紙のとおり							
補助事業実績期間	平成27年4月1日～平成28年3月31日							
事業推進担当者	氏名			所属・職名				
事業推進代表者				学長				
事業推進責任者				副学長				
会計事務担当者名	所属・職名			連絡先(電話番号、FAX番号、E-mailアドレス)				
		TEL						
		FAX						
		E-mail						

補助事業の実績	補助事業に係る具体的な成果
総論(補助対象期間中に行った事業の内容の概要を記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画の総論と対応させるように記載してください。)	(学生教育の観点での成果の概要を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるように記載してください。)
本補助事業の目的は、「グローバル社会で活躍する理系産業人の育成」である。その人材像は、具体的に次の4つの要素からなる。第一に「チャレンジ精神と主体性を持つ若者」、第二に「専門領域に関する確かな知識を持つ若者」、第三に「確かな語学力と異文化受容力を持つ若者」、第四に「自らの存在と母国に自信と誇りを持つ若者」である。その人材像を達成するために、本取組では3つの柱からなる「理系産業人養成プログラム」を構築する。第一に「理系3学部と外国語学部の連携による異文化対話能力を育てるプログラム」、第二に「学内外の学びの融合によるチャレンジ精神を植えつけ、主体性を育てるプログラム」、第三に「確かな技術を持つローカル企業のグローバル化に貢献する志を育てるプログラム」である。日本の企業行動を見ると、アジア諸国とのつながりが圧倒的に高まっている。本取組では、育成すべき人材像に掲げた「チャレンジ精神と主体性を持つ若者」を育てるために、アジア諸国を対象とした産学協働教育に着目し、その開発に当たっては同窓会組織との連携を一層進めていく。グローバル化した世界の中で、日本が揺るぎない地位を維持していくためには、一握りの指導者や企業人だけでなく、規模は小さくとも、確かな技術力を持った中小企業や幅広い民間レベルの国際交流が必要不可欠である。本取組は、本学の産学協働教育の蓄積を活かし、グローバル中堅層の拡充の必要性に応えることができる。上記の目的を達成するための多様な教育プログラムを円滑に遂行していくためには、従来の教員と職員という二分法にとらわれない職域の開拓も重要な要素であり、本取組では、学士課程教育における教学体制を充実させるために、教育重点型教職員を育成することも視野に入れている。海外に目を向ければ、米国では、教員と職員の境界に位置する専門職が大学改革の推進力になっており、本取組は「日本型教育専門職」のパイロット・モデルとして位置付けることも可能である。 更に本取組は、理系産業人だけにとらわれず、人文、社会科学系へと展開させていくことで、多様な分野の産業人育成にも拡張できるプロジェクトであり、大学全体のグローバル化にも貢献する事業である。この意味においては、本事業は京都産業大学のグローバル化推進事業の「スタートアップ事業」であり、補助期間終了後は、大学の経常経費で本事業を継続していく予定である。	コースが開始され、学生教育の観点からの成果がより充実した。例えば、2月19日～28日に行われた、集中講義科目「海外サイエンスキャンプ」は、GSCの科目の一つである。この科目の終わりに、学生による学習成果に関する記述が多く得られた。教育プログラムの価値については、「日本にいるときでは考えもしなかった生き方、英語の学び方、留学について学びました。」「海外で将来働くことも考えることができるようになりました。」「将来自分のやりたいことを見つけることができた。」「ぼんやりと描いていた夢が明確にかつプロセスの計画を立てることができた。」「質問することがコミュニケーションの上でも重要だということが分かり、今までとは違ったものを感じることができた。」「大学院への進学も視野に入れて立ち止まり、やりたいことを考えたり調べたりすることが必要であると感じた。」等の記述が得られており、多くの学生が、自分の人生設計が変わるプログラムだった等の声を寄せている。更には、多くの学生が海外留学、特に、海外での博士号の取得に意欲的になったとコメントした。外国人とのコミュニケーションについては、サンノゼ州立大学の学生とのコミュニケーションや、海外において日常生活を送るのに必要な語学力について、実感を伴った目標を設定する事ができるようになっている。 9月18日～20日に行われた4学部合同のプログラムである合宿型の「特別英語(英語サマーキャンプ)」では、英語レベル別に英語でのディスカッション、プレゼンテーションに必要な英語表現を実践的に学んだ。その後、講師とファシリテータのサポートの下、「理想の科学の授業とは何か」をテーマにしたポスター・プレゼンテーションの作成を行った。プレゼンテーション作成は学部の異なる2～3名のグループで行い、学生達は相互に志向の異なる学習意欲をもつメンバーから刺激を受け合いながら発表を行った。
(補助対象期間中に行った事業の内容を具体的に記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)	(学生教育の観点での成果を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)
① 4月～3月 eポートフォリオの運用と改善 ポートフォリオを用いて、入学時から卒業時までの学習成果物を保管できる環境を、教員や学生の要望に応じて整備した。毎学期の開始時に説明会を行い、毎学期終了時には教職員による面接およびポートフォリオ作成指導を適宜行い、学修支援を実施した。さらに、理学部の必修科目でポートフォリオの説明と実習を実施し、1期生の7割の学生に対して個別指導を実施した。	ポートフォリオの利用によって、きめ細かな個別の学生への支援が可能となった。本学独自の学生カルテとも連動し、低意欲学生の洗い出しと働きかけを行うことができた。高意欲層の学生には、自主的な学びの意欲のさらなる向上を意識づけることができた。
② 4月 自学自習英語(Eラーニング)システムの効果的利用の促進 自学自習英語システム利用の広報を行い、授業との連携や、自主的な勉強会で登録と効果的な利用促進を行った。また一部のシステムでは、学内webシステムと共通のログイン情報による利用を可能にし、学生に利用しやすい環境を整備した。	積極的に利用を促進したGSC学生について、同じ学部の学生に比べて平均60点TOEIC IPスコアが高く、英語力の向上が顕著であった。
③ 4月～3月 東アジア・東南アジアを初めとする国内外ネットワーク(理系企業を中心)の構築、理系インターンシップの開拓 GSCのワーキンググループで、理系学生のためのインターンシップ科目の新規開講についての検討を行った。既存のインターンシップ科目の履修促進のため、学生への情報提供を行った。国内外の企業と理系インターンシップ受け入れの可能性を折衝した。	理系学生へ積極的にインターンシップへの参加を促した結果24社(前年比: +8社)32名(前年比: +13名)の学生を送り出すことができた。 また、理系学生の受入ニーズが高い企業を積極的に開拓した結果、理系に特化した受入先企業が7社(前年比: +3社)に増加した。海外インターンシップとして、マレーシアで2件、香港で1件の新規受入先を開拓した。
④ 4月 理系特別英語プログラム(7科目)、グローバル・ジャパン・プログラム(11科目)、全学共通教育における英語科目(7科目)の開講。理系学部専門英語科目の開講・拡充 理系特別英語プログラム、グローバル・ジャパン・プログラム等、英語科目を開講した。(合計27科目)。学部専門科目として8科目の英語講義を開講した。	学生の英語力向上につながる語学学習の環境が改善した。理系学部が開講する専門分野の英語科目の拡充により、専門教育と語学学習の両立が可能となる環境が整備された。理系学部間で専門科目に関する情報交換のためのFD企画(第2回)を実施し、29名の教職員が参加した。専門科目の英語化について、教員の積極的な取り組みが可能となった。
⑤ 9月 外国語学部と理系3学部生対象の 夏期集中科目「特別英語 (英語サマーキャンプ)」の開講 9月18日～20日に、「特別英語(英語サマーキャンプ)」を実施し、GSC生54名、外国語学部生6名、学生ファシリテータ5名が参加した。	外国語学部の学生6名とGSCの54名が1泊の合宿を含む3日間の講座で、英語のみでディスカッションとプレゼンテーションを行い、専攻・コースの共同意識を育むとともに、英語力の集中的なレベルアップを図った。また、GSC1期生5名がファシリテータとなることで、2期生との縦の繋がりを形成するきっかけとなった。
⑥ 4月～3月 「海外サイエンスキャンプ」等の開発・実施。大学経常費による「渡航費奨学金」制度(3年目)の活用による留学の促進 シリコンバレー地域で、2月19日～28日の10日間の研修を行う「海外サイエンスキャンプ」を実施した。30名が履修し、履修者説明会で事前学習のEラーニングについて説明し、英語リスニングの強化を図った。帰国後は報告会を公開して行った。	履修者30名は海外の講師らによる講義の内容を理解し、積極的に質問するなどして学びを深めた。報告会では英語でプレゼンテーションを行い、研修による意識の変革を自ら分析し報告した。質疑応答にも積極的に対応し、英語力向上のみならず、積極性、自律性、自らの将来のキャリアに関する省察の面で大きな成長がみられた。帰国後の報告レポート、アンケートにおいても、その傾向が顕著にみられた。
⑦ 4月～3月 グローバル・サイエンス・コースおよびイングリッシュ・キャリア専攻のホームページ等における広報の実施 グローバル事業について、随時、本学のウェブサイトで情報発信を行った。GSCのパンフレットを作成し、理系3学部の入学志願者・決定者に配布した。	GSCについて広報活動、成果発信を行い、学生や入学志願者に、効果的な情報公開が可能となった。

⑧ 2月 グローバル・サイエンス・コース春季インテンシブセミナーの実施 9月14日と15日に、夏季インテンシブセミナーを実施した。GSCから14名、その他理系3学部から4名の学部生、職員2名が参加して、集中的に英語コミュニケーション力の向上を図った。	参加学生は密度の濃い講義を受講するとともに、学年・学部を超えて自身の興味関心についてディスカッションすることができ、学修意欲の向上を図ることができた。また、本学の語学研修に参加した職員も参加し共に英語を学ぶことで、職員の語学力向上に向けた取組との相乗効果が見られた。
⑨ 10月～3月 グローバル・サイエンス・コース・セミナーの実施。グローバル・サイエンス・コース定例勉強会の実施 GSCでは月例イベント2種(Monthly GSC:勉強会、Global Saloon:交流会)と、週次イベント(GSC+、週4回実施)を年間を通じて実施した。	月例イベントには平均して44名程度、週次イベントでは5名程度の参加があった。これらのイベントに高頻度で参加する学生は、学修意欲と積極性が顕著であり、「海外サイエンスキャンプ」を履修するとともに、自主的にGSCの活動を企画するコア・メンバーに成長した。
⑩ 4月～3月 京都産業大学版グローバル・ビレッジ新設計画の策定(レイアウト設計、什器選定、教材・資料選定、スタッフ運用計画等の決定)。特に2月頃から新2号館グローバル・ビレッジの竣工とパンフレット・利用案内の配布等広報活動を開始 グローバル・ビレッジプロジェクトチームにて、レイアウト設計、什器選定、教材・資料選定、運用方法の具体的な検討を行った。平成28年3月18日実施の新2号館(サギタリウス館)竣工式に向けて、グローバル・ビレッジ(グローバルコモンズ)の広報媒体(チラシ)を作成し、施設見学会を実施した。	グローバル・ビレッジ(グローバルコモンズ)のコンセプトに基づいたレイアウト設計、什器選定、教材・資料選定、運用方法の具体的な検討を行った結果に基づいて、本学学生が外国語習得および異文化理解を深めるための空間が整えられた。平成28年3月18日実施の新2号館(サギタリウス館)竣工式にて、グローバル・ビレッジ(グローバルコモンズ)を紹介するための広報媒体(チラシ)を配布し、施設見学会を実施したことで、4月オープン時からの積極的な施設利用が期待できる。
⑪ 4月～3月 グローバル・ビレッジ・ワークショップの試行開始。ワークショップの結果の分析、及び教材開発検討の開始。雄飛館ラーニングコモンズにおけるアクティブラーニングセミナー(外国語(英語)によるものを含む)の実施。学生スタッフによるラーニングコモンズにおけるイベントの企画、開催の支援。 口頭発表練習に重点を置きつつ、体系的な英語プレゼンテーションに関する知識習得を目的に、外国語学部初年次教育「特別英語」2クラスを対象に授業連携ワークショップの試行を行った。また、平成28年度グローバルコモンズの開設に向け、ライティング、プレゼンテーション、会話、文法、異文化理解の5分野における教材開発を行い、ワークショップにて試行した。本学におけるアクティブラーニング型授業の促進を目的に、平成27年6月、教育支援研究開発センターとの連携のもと、関西大学商学部准教授長谷川伸氏を講師に迎え、平成27年度第1回アクティブラーニングセミナーを開催した。また、雄飛館ラーニングコモンズにおけるアクティブラーニングの実践事例の検証のため、教職員を対象に「利用者アンケート調査」および「ヒアリング調査」を実施した。ラーニングコモンズ学生スタッフ(LCS)は、施設の保守管理業務の補助を行いながら、主体的な学びを体现すべく、グループワーク・ディスカッションを中心としたイベント企画を主催している。平成27年度は専門スタッフによる支援の下、平成27年12月に次の2イベントを実施した。「宇宙箱舟移住大作戦 ～今から宇宙に引っ越します～」では、京都大学宇宙総合学研究ユニット開発の宇宙箱舟を改訂し、本キットを利用して議論をしながら正解のない問いに対する答えを考えるワークショップを開催し、「LCSのグループワーク道場!! 第1回～三種の神器を使いこなそう編～」はペン(プロッキー)、付箋、模造紙を用いたグループワークの基本スキルを習得するためのグループワークセミナーとして開催した。	授業連携ワークショップへの参加により、英語プレゼンテーションに係る基礎知識を蓄え、実践練習を行うことによって、授業内での発表に質的向上がみられるだけでなく、正課外でも英語を使う機会を与えることが出来た。また、ワークショップ参加者に対してアンケートを実施したところ、レポートの構成、プレゼンテーション、英語表現など英語スキルに対する顕在的ニーズの高さが明らかとなり、平成28年度以降ワークショップとして実施すべき内容を把握することが出来た。アクティブラーニングセミナーでは他大学における実践事例報告を通じて、本学教職員のアクティブラーニングに対する理解を深めることとなった。また、アイスブレイクの実践とグループワークを行ったことで、個人、グループ、クラス全体でのワークバランスについて考える機会となり、実際の授業運営への応用を促進することとなった。このほか、雄飛館ラーニングコモンズにおけるアクティブラーニング実践の収集・検証を実施したところ、アンケート調査に回答した教職員の7割強が学生の学びへの変化を実感しており、また回答者のすべてが、通常の教室や既存の学習空間との違いを実感していることが明らかになった。ラーニングコモンズ学生スタッフ企画イベントに参加した、学生スタッフ以外の学生の中から、自主的にワークショップや勉強会・セミナーを企画・実施したいとする声があり、その相談に応え、学生有志団体による企画「狂言においてやす」(平成27年5月)を開催するに至った。本イベントでは狂言師吉住講氏、泉慎也氏を招へいし、狂言鑑賞会およびワークショップが実施された。このことから、ラーニングコモンズ学生スタッフの活動が学生による学内活動の活性化へと繋がっていることが見受けられる。
⑫ 4月～3月 学習支援の充実(日本語ライティング支援担当の専門職員と初年次教育に関する授業連携の開始、雄飛館ラーニングコモンズにおける自学自習英語システム利用説明会・勉強会の実施、日本語/英語ライティング、プレゼンテーションに関する専門職員の個別相談対応の拡充、スタディ・スキルに関するワークショップの開催) 雄飛館ラーニングコモンズ内学習支援カウンターでは日本語・英語ライティング、ICT支援担当の専門スタッフを配置しており、個別相談対応のほか、雄飛館ラーニングコモンズの利用促進と学生の正課外学習を支援する目的で、日本語・英語のワークショップ4シリーズを実施した。また、授業連携の試行としてキャリア形成支援プログラムの1つである共通教育科目「自己発見と大学生活」や経営学部初年次科目「外書セミナー」等において、授業の1～2コマを利用し、日本語・英語のライティングに係る授業モジュールを提供し、専門スタッフによる出張ワークショップを実施した。自学自習英語システムの利用促進を目的に、E-learningソフト「スーパー英語」を利用した英語学習に関するオリエンテーションを11月17日および、11月19日に2回ずつ、全4回実施した。	英語個別相談を通して、ライティング、プレゼンテーション双方に必要な文法について理解を深める必要があることが明らかとなった。その結果、情報、自らの考えなどを伝達するための基礎文法について、解説およびその文法構造を使った会話をワークとして実施するアウトプットに重点をおいたワークショップを実施するに至った。初年次科目への出張ワークショップを実施することで、大学での学習におけるライティングおよびプレゼンテーションなどのスキルの必要性を学生に対して認識させ、専門科目へつなげる基盤を形成することができた。自学自習英語システムのオリエンテーションでは、操作方法の手順だけではなく、英語学習の意義および英語を使えることによる自身の可能性の拡がりを再認識させ、英語学習への動機づけとすることができた。
⑬ 4月,7月,1月 4月に入学生へのプレイスメントテスト(TOEIC Bridge)の実施。7月に必修英語プログラムを修了する学生へのTOEIC試験(TOEIC IP)の実施。1月に1年次生と2年次生へのTOEIC試験(TOEIC IP)の実施 平成27年度の入学生の3,116名が4月1日にTOEIC Bridgeを受験し、TOEIC英語科目のプレイスメントを行った。入学時にプレイスメントテスト(TOEIC Bridge)を実施し、全入学生に関するデータの蓄積、およびデータに基づいた教育改善を行った。7月時点(春学期終了時点)にて、必修英語プログラムを修了する学生に対し、TOEIC IPテストを実施し、入学時のプレイスメントテスト(TOEIC Bridge)との比較により伸び率を確認する。第2セメスター終了時と第4セメスター終了時にTOEIC IP のテストを実施し、入学時のテスト結果との比較により伸び率を確認した。また、これらは授業内容の改善資料とした。秋学期に、共通教育科目(英語)を受講した2年次生、1年次生がTOEIC IPを受験した。2年次生は1年次時のテストとスコアを比較した。	学生は入学時に受験するTOEIC Bridgeの結果を確認することで、自らの英語力を把握する事ができた。また、その結果、学生のレベルに見合った習熟度別クラスに配属することができた。これにより、学生の能力に応じた教育を行うことが可能となり、英語力の向上が図れた。入学時の英語レベルを把握できるため、その後のTOEICテストと比較することにより、成績の変遷を追うことができ、本学の教育プログラムの直接的な効果測定を行うことができた。
⑭ 4月～3月 履修要項・シラバス英文化の促進 学部、大学院各研究科「教育研究上の目的」及び「3つのポリシー」を英語に翻訳した。平成27年度より、大学院案内が日英語併記となった。	英語開講の授業科目のWebシラバス・システム検索機能を導入し、学生は、短・長期留学時の履修相談において、本学の英文教育情報を参照、利用することが可能となった。大学の質保証基盤、教育環境のグローバル化への対応の改善を図った。
⑮ 4月～3月 事務体制のグローバル化(H25年度に発掘した学内英文化ニーズへの組織的対応についての検討。グローバル職員のロールモデルの作成。職員英語力向上のための研修会の実施) 英文化の実務を担当するグローバル化推進室に加えて、英文化ニーズの評価、英文化、英文文書更新作業を行う学内部署および関連するプロジェクトチームの体制を強化した。GSC履修要項等の学内文書の英文化を完了した。また、昨年度に引き続き、タイのチェンマイ大学における短期海外研修を実施し、派遣された4名の職員による研修報告会を行った。研修プログラムと事前事後学習の改善を行うとともに、海外協定校(ドイツ ルードヴィヒスハーフェン経済大学)から職員を招き、新規の職員交換制度設立に向けた調整を行うなど目指すべきグローバル職員のロールモデルを作成した。	学内文書の英文化により、教育環境のグローバル化状況の改善が図られた。学生に必要な情報の英文化が進み、海外からの留学学生へのサポート環境が充実した。また、海外研修参加職員の語学力、異文化対応能力向上の取組を通して、グローバル職員のロールモデルの検討が進んだ。海外研修報告会には39名の職員が参加し、研修参加者のみならず、職員全体へのグローバル化意識の向上が図られ、教育環境のグローバル化状況の改善の必要性が確認された。

⑮ 4月～3月 入学体制のグローバル化(入学センターと教学センターのデータを活用したIR分析事例の構築、高大連携FD研修にかかわる調査と分析) IR分析について、事例の1つとして、教学データと入学データを活用した分析事例を作成した。高大接続FDについて、11月24日(火)に、京都産業大学附属高校において、高大接続FDを実施し、高校・大学の教職員が英語プログラムに関する情報交換を行った。また、この成果について報告書をまとめた。更に、この成果報告と合わせ、他大学事例について情報を収集し、報告書としてまとめた。	入学と教学のデータを結合することで、学生の入学から卒業までの学習成果の経年変化を、入試種別別に一望し分析することができた。高大接続FDを実施することで、高校の英語教育の実態を大学の英語担当教員は現場感覚で知ることができた。当日の意見交換では、学部や教科に特化した具体的な意見交換の場を求める声が上がリ、これらの取組に高大ともにニーズがあることが確認できた。また、実現可能な高大接続FDの実施形態について1事例を得ることができ、今後のひな形として活用することができる。
⑰ 3月 『高等教育フォーラム』(第6号)の発行 (FD/SDセミナーの実施報告、専門職員に関する職域や雇用形態に関する調査報告(教員の教育力評価を含む)、理系学生のためのPBL型授業に関する報告) FD/SDセミナーの実施について、4月と6月に、新任教員研修会を実施した。6月に「アクティブラーニングなんかぶっ飛ばせ」と題した全学FD/SD研修会(新任教員研修会の午後セッションも兼ねる)を実施した。4月と9月に、TA研修会を実施した。9月に職員向けのファシリテーション研修会を実施した。9月実施のTA研修会では、全テーブルのファシリテータや会場全体のコーディネータを、ファシリテーション研修会でトレーニングを受けた職員が担当した。第三の職域に関する調査報告を大学教育学会にてポスター発表し、3月末に報告書としてまとめた。『高等教育フォーラム』を3月末に発行した。海外サイエンスキャンプの成果報告会を実施した。	高等教育フォーラムの第6号の発行により、本学の教育改善に関する挑戦的な取り組みについて、網羅的に知見をまとめ、発信することができた。これにより、本学学生のそれぞれの取り組みにおける学習成果を把握することができる。
⑱ 3月 外国語学部と理系3学部のTOEICスコアの分析の実施(教学IRにおける調査・分析体制の強化)及び、外部評価の実施 1月15日に前倒しして、外部評価委員会を開催した。外国語学部と理系3学部のTOEICスコアの分析の実施(教学IRにおける調査・分析体制の強化)について、グローバル化推進室内にてデータを吟味し、調査研究PTより、親PTに調整を行った後、外部評価委員向けのリーフレットとして分析結果をまとめた。	本事業の4つの柱を、特にTOEICスコアの分析を中心として学習成果をリーフレットにまとめたことで、本事業が学生の成長にどのような影響を与えたのかについて、外部評価委員と共に検討することが可能となった。この取り組みは、教育情報の発信の観点から本事業の評価を担当する外部評価委員から、とりわけ高い評価を受けた。
⑲	
⑳	

(注) 交付申請書の「補助事業の目的・必要性」、「本年度の補助事業実施計画」と対応させて分かり易く記入すること。

